

『難経存疑』執筆に用いられた 『難経本義』整版について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

京都大学附属図書館蔵『難経存疑』（書題は「難経本義」．ただし版心に「難経存疑」、尾題に「難経本義存疑」：函架番号7-02/ハ/1 貴）は、百々鳩窓（1808～1878）による『難経本義』の序文と本文に対する注解書（自筆稿本）である．本書は、『難経注解叢刊』（オリエント出版社、1994年刊）に収録され、後に百々漢陰・鳩窓の主要な著作を網羅した『百々家本東洋医学稀書選集』（同、1995、1997年刊）にも影印されている（以下「稿本」と略称）．

ところで、同図書館に所蔵される寛永10年（1633）刊行『難経本義』（函架番号7-02/ナ/7）の文中及び欄外には、稿本と同文の書入れが多数みられる（以下「整版注」と略称）．この版本は古活字版を底本に整版としたもので、巻末に曲直瀬玄朔の跋がみられ、「百々復太郎寄贈」の蔵書印がある．

両書を比較すると、稿本では先ず掲法序、張翥序、劉仁本序、滑伯仁自序それぞれの段落分けがなされているが、その段落分けは、整版注に見られる区切りの印と対応する．「凡例」「闕誤総類」「彙攷引用諸家姓名」は、稿本では篇題が羅列されるのみであるが、その後に朱墨の細字で「本義引用諸家姓名」中の楊玄操についての注が附加されており、整版注にもこれに対応する箇所には朱墨で指摘がある．「難経彙攷」は、稿文においては各条文の一部を引いて、整版注と同文が見られる．「難経図」は、それ自体が稿文には見られないが、整版注では朱墨で各図に何難の図であるかが示されている．

稿文においては、一難の前に注解が一葉半程度みられるが、これは整版注の「難経図」末尾に見られる細字注と同じである．一難の本文と滑氏の注に対する注解についても、整版注に同文がみられるが、滑氏の注に対する言及は見られない．二難では、滑氏の「尺」に関する注で『集註難経』『俗解難経』を引き、「尺寸」に関する注で孫思邈『千金要方』卷二十八・平脈大法を引いて注を加えている．さらに滑氏の注で尺沢から腕関節横紋までを一尺とする説について、徐大椿の『難経経釈』を引いて批判している．また、呉勉学校正本は、二難滑壽注の「分猶別也」の後に「此自魚際穴起一寸之後分為尺、自尺沢穴一尺之前分為寸也．」という24字の細字注がみられる．滑壽注の前後から判断して一尺の説であるのに対して、細字注は一尺一寸であるため、滑氏の説ではなく徐氏の説であると指摘している．尚、整版注の呂復校正本には、上記細字注は無く、呉氏は誤解してこの注を入れたと述べている．以上、稿本のこれらの注は、若干の出入はあるものの、すべて整版注にも見られる．ただ、例えば十五難に見られるように、稿本には長文の注解がみられるも、整版注には、その一部しか対応する注がない場合もある．またこれとは反対に、整版注に稿本には見られない注文があることもある．

両書の内容の比較検討から、先ず『難経本義』に附注を行い、その後に、附注を参照しながら『難経存疑』稿本を作成したと推察される．ただ、両書の間には内容の出入もみられるため、整版注を看過することはできない．参考までに附記しておけば、『素問存疑』『靈枢存疑』の成立に関わる附注本は確認できなかった．

本書は、百々鳩窓の研究課程を示す貴重な資料であると考えられる．